

# 公開講演会「経験を書くとは？」を振り返る

永田 貴聖<sup>1</sup>

## 1. はじめに一主に登壇者について

2026年1月9日金曜日の午後4時30分から講義館4階C403号教室において、2025年度第3回キリスト教文化研究所 共同研究「多民族社会における民族と文化」主催 公開講演会「『経験を書く』とは・・・」を開催した。ここでは、この企画の内容を一部紹介しつつも、登壇者たちの講演会前後の活動や、なぜこの企画が実現できたかの経緯について振り返る。本論はこの講演会の企画・司会を担当した私、永田貴聖の私見であることを理解いただきたい。

まず登壇者の紹介をする。金村詩恩さんは、「著述家」であり、1991年に生まれた日本籍の在日コリアン3世である。日本大学法学部卒業後、都内の企業に勤めながら ブログ『私のエッジから観ている風景』を開設した。最初の職を辞めた後、2017年12月に「ぶなのもり」から金村詩恩さん自身で書き下ろしたブログをまとめた『私のエッジから観ている風景—日本籍で、在日コリアンで』（2017年刊行）を出版している。現在も、会社員をしながら執筆活動を行っている。特に、継続したブログの執筆においては、社会に対する疑問や、在日コリアンである自身だからこそ感じる日本の社会にある外国人移住者や在日コリアンへの視線や排除に対する鋭い批評を展開している<sup>2</sup>。あえて言えば、金村さん自身の経験を時系列的にまとめるというよりは、社会で起こる差別や排外主義的な言動や扇動、マイクロアグレッションのような事から、日常の出来事までに視点をむけ、批評の中に金村さん自身の経験や、家族や先祖から語り継がれてきた中身が含まれている記述が多い印象である。金村さんは永田よりも10歳以上若い「日本国籍の在日コリアン」である。しかし、金村さんと永田の違いは、金村さんはいわゆる「帰化」の手続きを経て、「日本国籍の在日コリアン」となったのに対して、永田は、生前に両親の「帰化」により「日本国籍」となった点である。私は金村さんの著書と出会ったとき、世間では、韓流ブームが盛り上がる一方で、ヘイトスピーチや嫌韓論がある日本における挑戦作であると感じた。そして、ルーツの歴史に対して、荒削りな理解の永田と比較して、歴史、それも、権力が作った歴史ではなく、家族から伝えられた生の歴史を深く継承しようとしている。

もう1人の登壇者である中島弘象さんは「ノンフィクションライター」である。「著述家」ではない。これもそれぞれの違いである。1989年に愛知県春日井市で生まれた。こういうと語弊があるか

<sup>1</sup> 宮城学院女子大学 現代ビジネス学部 現代ビジネス学科 教授

<sup>2</sup> 詳しくは次の URL を参照されたい。金村詩恩公式サイト

[https://zionsion.com/?fbclid=IwY2xjawQ4r8pleHRuA2FlbQIxMQBicmlkETFhMlg1aE1va0ZpWkxSZGdte3J0YwZhcHBfaWQQMjIyMDM5MTc4ODIwMDg5MgABHr\\_-1PUYh15R-tvw3BAR3ZqKgUZQEF0ZUyXi-qgQ35Jz5ic98oowfdaEFnK-\\_aem\\_x\\_Pr6v\\_Aj7XwKdV6rvrbkA](https://zionsion.com/?fbclid=IwY2xjawQ4r8pleHRuA2FlbQIxMQBicmlkETFhMlg1aE1va0ZpWkxSZGdte3J0YwZhcHBfaWQQMjIyMDM5MTc4ODIwMDg5MgABHr_-1PUYh15R-tvw3BAR3ZqKgUZQEF0ZUyXi-qgQ35Jz5ic98oowfdaEFnK-_aem_x_Pr6v_Aj7XwKdV6rvrbkA) 2026年3月1日検索。

もしれないが、あえて言うと、中島弘象さんから話を聞く限り、家族の構成や日常生活など、いわゆる「日本の幸せな普通の家族」である。中島さんは、中部大学を経て、同大学大学院の修士課程（国際関係学専攻）を修了している。2017年、大学院在学中に修士論文の執筆のために「フィリピンパブ」が集まる歓楽街として有名や名古屋市中区栄において取材を行った際の経験をまとめた内容は、『フィリピンパブ嬢の社会学』（新潮新書）として出版された。この中では、栄のパブで働いていた現在の妻であるフィリピン人女性ミカさんとの恋愛経験や、ミカさんが偽装結婚から抜け出し、中島さん自身と結婚するまでの紆余曲折の過程や、その後のミカさんがフィリピンの家族に多くの仕送りを続けることなどへの葛藤について記述している。これはフィリピン移民研究者の永田からすると「よくここまで書いたよね・・・、ある意味すごい」という強烈な印象である。2023年、続編として『フィリピンパブ嬢の経済学』（新潮新書）も出版している。その後、会社員として勤務するかたわら、継続して、日本在住のフィリピン人や、日比ハーフたちなどに精力的に取材を展開している。2023年『フィリピンパブ嬢の社会学』は映画化され<sup>3</sup>、2024年には舞台化され<sup>4</sup>、2026年にはミュージカル化された<sup>5</sup>。

## 2. 講演会の経緯

この講演会が企画された経緯は、企画・司会を担当した永田が金村さんと中島さん両方と面識があったという単純な話ではない。『フィリピンパブ嬢の社会学』が出版された後、中島さんから映画化の話聞いていた。しかし、数年経過して実現には至っていなかった。中島さんが現在の職場に就職してからも、講演や取材活動を行っていることを聞いていたので、しかるべき時期に実現するものだろうと期待していた。この間、私は仙台への赴任が決まり、京都から仙台に移住していた。その後、コロナウイルス感染症の拡大もあり、進展を聞くことがなかった。そして、朗報は突然だった。知ったのは、ウェブ上での映画化の宣伝であった。さらに、仙台で上映されるということで、私は中島さんに連絡をした。連絡するのは数年ぶりだったが、以前と同じようにSNSにはすぐに応答がきた。2024年4月、仙台フォーラム上映での舞台挨拶のときによく再会した。

舞台挨拶の後、中島さんとは久しぶりに食事をすることにした。コロナ禍でのそれぞれの生活の変化について話した。そして、その中で、私は金村詩恩さんと出会ったことについても話した。中島さんも金村詩恩さんのことはよく知っており、大変興味深いエッセイだと話していた。ただ、この時はそれ以上の話はなかった。

金村詩恩さんとは、私が単純に金村さんの一ファンとして知り合った。彼がSNS上で行っていたオンラインの公開トークセッションに参加して興味を持ち、韓国研究をしている大学院の後輩が偶然に金村さんと会ったことがある関係で、無理矢理に紹介してもらった。コロナ禍でオンラインでの企

---

<sup>3</sup> 監督：白羽弥仁 脚本：大河内聡 制作・配給：キョウタス

<sup>4</sup> 作・演出：有田あん 主演：ステファニー・アリアン 主催：キョウタス 2024年11月28日～12月1日 ささしまスタジオにて開演

<sup>5</sup> ミュージカル版フィリピンパブ嬢の社会学 マリピモ (Maligaya sa Piling Mo) 脚本・演出：荒川裕介 総合指揮：佐藤俊輔 2026年1月31日～2月1日 春日井市民会館にて開演 主催：KIDS HEART・キョウタス

画が多かった時期である。はじめて会ったのは2021年の末頃、私が東京に行ったときである。金村さんがわざわざ時間をつくってくれたことを記憶している。その後、東京のトークイベントに行き、2次会の食事会まで参加して、新宿の金村さんが良く行く店にも連れて行ってもらった。金村さんのご自身の家族の歴史、特に、済州島出身であった父親の祖母の話とどう向き合うかについて常に考えていた。

金村さんには、本共同研究「多民族社会における宗教と文化」2023年10月24日（2023年度第2回公開研究会）に来ていただき「『家族の歴史を語る』を語る」という内容で主に話をしてもらった。中島さんには、『フィリピンバブ嬢の社会学』が『マハルコ組曲』として舞台化された後、本共同研究「多民族社会における宗教と文化」2024年12月19日（2024年度第3回公開講演会）「『フィリピンバブ嬢の社会学』から舞台『マハルコ組曲』まで」という題で、私とはトークセッションという形でかなり自由に話してくれた。こちらの講演会終了後、中島さんと話す中で、金村詩恩さんと中島さんが登場する企画をやろうという話がでた。早速、金村詩恩さんに連絡をとることにした。そして、この講演会で質問してくれた本学一般教養部の間瀬幸江先生が中島さんに話す内容に深い興味を抱き、後に、今回の講演会での「指定質問」の役割を快諾いただいた。「語り」と演劇の専門家である間瀬先生の存在は頼もしい限りであった。

### 3. 当日の内容

さて、2026年1月9日当日を迎えることとなった。1週間前に、オンラインで打ち合わせを行い、ふたりにはそれぞれにそれぞれの書き方や文体について自由に語ってもらうということになった。

まず、中島さんから大学院時代にフィリピン女性がいることをうりにしている「フィリピンバブ」という形態の店がなぜ日本にあるのかということに興味を持ったことや、調査を実施する過程で最初はインタビューするつもりだった女性と恋愛関係になり、やがて結婚し、現在に至っていること、最初の著作はまさにその経験談であることが説明された。

金村さんは大学時代に国際政治、文化人類学（沖縄研究）、映画研究（台湾映画）のゼミをかけもちしながら、2人の映画監督につき、映画の製作の手伝いをしていた時に書いていたSNSを読んだ友人からブログを書くことをすすめられ、それがやがて出版へとつながったことが語られた。

中島さんは大学生時代、将来や社会について、なにか「もやもや」として疑問があり、いまでもそれをもちつづけながら、取材を行っている。しかし、文章ではその「もやもや」はあえて表現していない。しかし、映画や、演劇になった自身の著作をみたときに「もやもや」が表現されていることに驚いている。

金村さんは、文体とはその文章を書く人の生きている姿勢であり、その人と他者、その人と社会との向き合い方を体現しているものであると考えている。8年近く経過した自身の著作は「書き足りない」印象をもっている。金村さんは「関係の向き合い方が堅い」と表現している。その影響として、SNSやブログの登場により字数が多くても1500字程度で表現しないといけなくなったことに要因があると痛感していた。当時を振り返り、立て続けにおこる外国人移住者や海外ルーツの人々に対するバッシングに対抗するために立て続けに短文で対応することが求められた時期であったことを振り

返っている。

中島さんは、商業出版は自身が調べたり、書いたりしたものもより、売れるために恋愛の部分がつよくなったりと編集の手が入ることも多いことが説明された。

金村さん中島さん双方とも共通していたこととしては、自分が書いたことは時間が経過して読んでみると印象やその時思っていることは変化するということであった。そして、自分の経験を書くことは、時に、向き合いたくない嫌な経験をかかないといけない場合もあり、それがかなり辛い部分もあることを語っていた。

また、自分を書くとは自分を書くだけではなく、配偶者や家族のことを表現することにもなり、それを全部表現してよいのかどうか難しい場面もある。しかし、自分を書くことで、自身の生きづらさの解消につながることもあることもあるようだ。特に、中島さんが強調していたのが、自分のことよりも取材した相手のことを書くときに慎重になるということであった。その後、話は多岐にわたり、最後のほうは、金村さん中島さんとも「将来どうします?」という他愛もない話になっていった。

そして、指定質問の間瀬先生は、おふたりにではなく、フロアに集まった学生に対して、「みなさん、書くということを普段どうしているのか?」と質問した。書くという事は、人にみせるわけではないけど、長々と書くことも、一日に一回短くてもかくことなどさまざまである。参加した学生の中にはみた映画の感想ではなく内容構成や作品論を必ずブログで書く学生がいた。その後、自由に書くのか。また、学術研究のように形式に基づいて書くのかなどの議論が続いた。金村さん中島さん双方とも参加者と積極的にやり取りをする濃密な会となった。